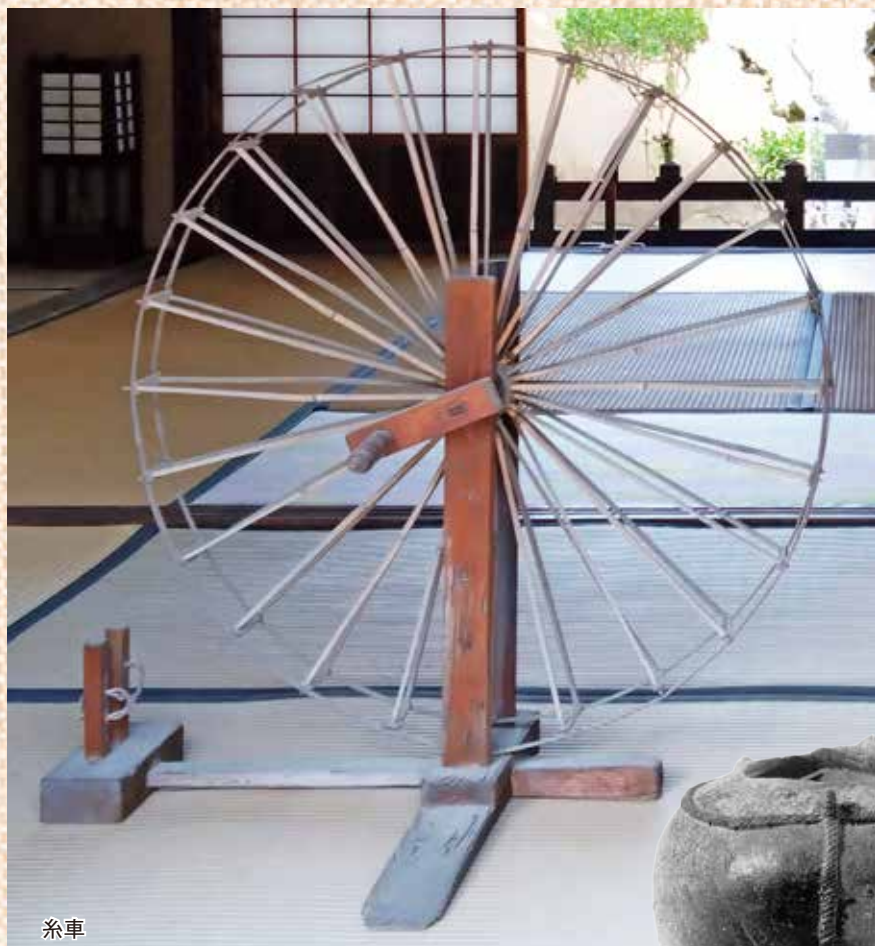


紡ぐ・編む・織る

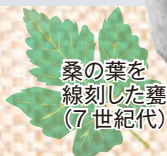
古代から続く紡織技術



糸車



桑の葉を食べる蚕



桑の葉を線刻した甕 (7世紀代)



入場無料

2026年

10月14日(水)～12月20日(日)

会場 / 船迫窯跡公園体験学習館 福岡県築上郡築上町大字船迫1342番地22

時間 / 9:00～16:30 (月曜休館) *ただし11/23(月/祝)は開館し、翌日休館

記念
イベント

講師：林 久美子氏(シルクキュレーター / 元岡谷蚕糸博物館学芸員)

場所：船迫窯跡公園体験学習館

定員：各回20名 ※電話による事前申込が必要 / 先着順(船迫窯跡公園 ☎0930-52-3771)

参加費：無料 ※小学3年生以下は保護者同伴

■カイコと絹～実演と体験～

弥生時代(2,000年前)に中国大陸から伝わった養蚕と蚕糸。養蚕についてお話を聞いた後、蚕の作った繭から糸を繰り、絹を生み出すまでを実演・体験します。

日時：10月18日(日) 10:00～12:00

■植物と布～実演と体験～

縄文人(10,000年前～2,300年前)も身に着けた編布(アンギン)。さまざまな植物繊維が形になるまでを実演・体験します。

日時：12月6日(日) 10:00～12:00

*各回終了後、学芸員による展示解説を行います。(希望者のみ)



I. 縄文時代にはじまる編み物技術

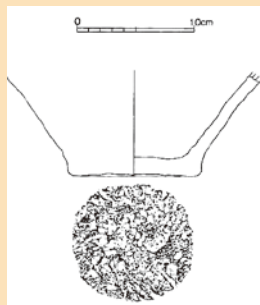
今から10,000年前の縄文時代早期、人々はカシ類やイヌビワ等の常緑広葉樹の木材を割り裂いたヘギ材や蔓植物を編み組んだ編みカゴをドングリの水漬け保管や運搬に使用しました。大坪遺跡（築上町本庄）では押し型紋土器と呼ばれる連続した山形紋様や楕円形紋様を施した縄文時代の土器が出土していますが、これらの紋様は当時使用された編みカゴの編み目を表現したと考えられています。

また、こうした土器を製作する際、編み敷物の上に土器を置き、回転させながら成形したようで、松丸D遺跡（築上町松丸）出土の土器には外底部に植物繊維の編み目痕が粘土に押捺された圧痕として残ります。

ところで、今よりも寒かった旧石器時代（約5万年前）、ヒトは石器で鞣した獣皮を身に着けていました。縄文時代になり徐々に気候が温暖化すると、獣皮の衣服は多湿な日本の風土に合わず、カラムシ（イラクサ科/麻の一種）の繊維を撚った糸を編んだ編布（アンギン）の衣服を身に着けるようになりました。カラムシの茎を一晩水に漬け、横槌で叩き、スクレイパー（皮鞣しに使用される石器）で繊維以外の不要部分をそぎ落とします。その後、乾燥させ、紡錘車で繊維に撚りをかけて糸を作りました。築上町では縄文時代の紡錘車は出土していませんが、船迫窯跡では古墳時代（6世紀）の須恵器製が出土しています。こうしてできた糸を右写真の道具で編んで布を作り衣服としました。築上町にはアンギン編みの道具はありませんが、俵編み器と槌の子がこれと同じ原理の道具です。（俵編み器は展示しています）



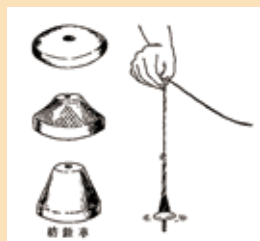
押し型紋土器（10,000年前）



松丸D遺跡（4,000年前）



船迫窯跡出土の紡錘車



（参考）アンギン編みとコモツチ

II. 稲作と蚕糸技術の渡来～糸を紡ぐ

中国の歴史書『漢書地理志』や『後漢書東夷伝』には、弥生時代（2,300年前～1,700年前）の日本の男性は体に巻きつけた「横幅衣」を着用し、女性は布の中央の穴に頭を通す「貫頭衣」を着用していたと書かれています。また、その布の素材が、カラムシなどの植物繊維や、蚕の繭から採れる絹であることが記されます。（当初は天蚕（右上写真）を用いた）

カラムシなどの植物繊維から布を作る技術は縄文時代以来のものですが、蚕から採る動物性の繊維「絹」は稲作とともに弥生時代になって

中国大陸から渡来したと考えられています。蚕は、野生の蚕「野蚕」と人が飼育する「家蚕」の2種類に分けられ、野蚕には、クワコをはじめ多種類が知られています。しかし、野蚕は安定して手に入れることが難しく、また育った環境により糸の太さが異なり、均質な糸を得にくいので、安定した絹織物生産を行うには同じ環境で育った大量の繭を得られる養蚕を行うことが必要でした。こうして中国で家畜化された養蚕は日本に伝わりました。『魏志倭人伝』には、弥生時代後期（3世紀中頃）に邪馬台国の女王、卑弥呼が魏の皇帝に美しい絹織物を献上したことが記されます。

ところで、豊前地域は古代より、窯業・養蚕を朝鮮半島から伝えた渡来人、秦氏が多い地域です。7世紀の穴ヶ葉山古墳（道壁画や垂水廃寺出土の重弧紋平瓦（いづれも上毛町）、荒堀雨久保遺跡出土須恵器甕と蓋（豊前市）には蚕のエサ、桑（クワ）の葉紋様が線刻され、当地で養蚕が盛んだったことを物語ります。

また、築上町でも戦前まで養蚕が盛んで、蚕の繭を集荷する乾繭所（築上町椎田/旧椎田保育園の場所）がありました。



天蚕（野蚕の一種）の繭
クヌギの葉等を食するため繭玉が緑色



荒堀雨久保遺跡（豊前市）出土甕
クワの葉紋様が線刻（7世紀）



様々なクワ（桑）の葉
繭の線刻は中央のクワの葉の形に類似

III. 布を織る

小倉城下屋敷跡（現小倉城庭園）出土の長宜子孫内行花文鏡（弥生時代/3世紀）は絹糸を経糸・緯糸交互に織った平絹2枚（うち1枚は水銀朱で染色）と高級絹織物「羅」（経糸を互いに絡ませながら緯糸を通して織る薄く透けた織物）で包まれた状態で出土しました。当時、高貴な人物は遺体や副葬品を絹織物で包んで埋葬されました。

律令時代（7世紀後半以降）には租・庸・調の税が定められ、「調」として絹や麻は布で納められたほか、杵や糸杵に巻いて総の状態に納められました。

川角遺跡（築上町宇留津）では古墳時代中期（5世紀代）の木製品が多数出土していますが、その中に糸を巻いた杵のほか、原始機の一部と考えられる部材が見られます。どんな糸で織っていたのでしょうか。

また、船迫窯跡出土の瓦凹面には成形時に付いた麻布痕が見られます。



長宜子孫内行花文鏡
北九州市指定文化財
平絹と高級絹織物「羅」で包まれる



かせ
杵（宇留津川角遺跡出土）



かせ
杵（糸を巻く） / 総（絹糸）



民俗資料 / 絹糸は糸杵に巻き
総をつくる